

## 国際口承文学学会

### 第七回世界大会の報告

小沢俊夫

表題の会が本年八月二十一日から十八日までスコットランドのエディンバラ市で開催された。まずデータ的なことを記しておく。

毎日午前九時二十分から五時頃まで、昼夜各一時間四十五分とコヒーブレイク三十分をはさんで、三ないし五会場にわかれて研究発表があった。十五日には二群にわかれロックロー・モンドなどへバスツアー。夜は伝統的ストーリーテリングとバラード歌いの演奏会（大学の教室で）。十六日午後は総会。決定事項は次のとおり。  
一 会則の改正。二十年前の創立時の会則を現状にあわせて改正。  
名譽会長、名譽会員をおくことが可能になり、本部は会長国におくことになった。（そして名譽会長には西ドイツのクルト・ランケ、名譽会員にはスイスのマックス・リュティ、イギリスのキャサリン・ブリッグス、アメリカのウェイランド・ハンド・リチャード・ドーソンが推され、決定した）。

二 第八回大会開催地。インドのミズーレ市、エジプトのカイロ市、ノルウェーのベルゲン市、西ドイツのライプツィヒ市、カナダのケベック市が立候補し、それぞれの立地条件や市、国、大学からの援

助態勢などについて説明した。特にインドの立候補は予期されていなかつたし、発言者も初顔の若手研究者であったので、かなり危惧の念をもたれ、会長が詳しい事情と国からの援助の確実性について説明を求める一幕もあった。投票の結果、ベルゲン二十一票、フランス二十票という小差でベルゲンと決定。一九八四年六月の予定。

三 役員選挙。アメリカのドナルド・ワードの提案で現会長、副会長がそのまま一九八四年まで任務をおこなうことに決定。ただし、南米出身副会長スザナ・チャルトウディが死去し、南米にはほどんど会員がいないため、そして他方では中央ヨーロッパに副会長がないため、西ドイツのルッツ・レーリヒが副会長として新たに選ばれた。

新会則によつて設けられたエグゼクティブ委員会（いわば運営委員会）には、イスラエルのドフ・ノイ、ハンガリーのテクラ・デーメーテル、インドのジャワハルラル・ハンドゥーが選ばれた。

理論委員会は従来しつかりした位置づけもなく、構成メンバーも明確でなく、理論的侧面に興味をもつ人の任意参加の形で運営されてきたが、今回の総会でその重要性が唱えられ、選挙の結果、アメリカのリンダ・デーク、カナダのピエール・マランダ、アメリカのドナルド・ワード、ハンガリーのフィルモス・フォイクト、西ドイツのルッツ・レーリヒ、イタリアのジョバンニ・バチスタ・ブロンツィーニが選ばれた。

会計は従来どおり、フィンランドの若手ユハ・ペンティケイネン。会費は従来、年間一ドルだったが、年間三ドルとなった。学会運営上は三ドルでは用をなさないが、役員会の席上、共産圏出身副会長チストフが、共産圏ではこれ以上の会費にしたら国が参加を認めな

いであろうと説明したため、やむなく三ドルと決定した。今回の全参加者は約三百四十名。

さて研究発表についてだが、五年に一度の会となると発表者の顔ぶれも一回ごとにかわってくる。今回はクルト・ランケ、リチャード・ドーリンが健康上の理由で欠席、ハンガリーのオルトタイ、スウェーデンのヴァルデマール・リウングマンが死去で、一抹のさびしさを感じえなかつた。一方、キャサリン・ブリッグスは発表こそしないが老体にむちうつて会期間出席して心強かつた。マックス・リュティの出席もたいへん嬉しかつたが、テーマが『語り手と社会』と限定されていたため、彼は『このテーマでは私は何もしてきていないから』と書いて発表せず、若い研究者たちから残念がられていた。

今回は「語り手と社会」というテーマに従つて発表を募集したため、語り手研究の発表は多いといいう利点はあつたが、逆にいえば五年前に一回の会なのに、口承文芸研究の多様な側面の議論にならなかつた。この点については役員会においても批判的になつたし、会員のなかからもかなり批判が聞かれた。もちろんテーマの統一にはおまいまいなく、自分のテーマで発表した人もある程度いたことも付記しておく。ここでは特に注目をひいた発表にしぼつて報告する。このテーマでいくと西ドイツのように、マルヒエンの語り手がもう存在しなくなつた国では、国内からの報告をする余地はほとんどないが、フライブルクのブレードニヒは十六世紀にドイツからロシアに集団移住し、さらに革命時にカナダに移住して、現在もドイツ人だけのコロニーを形成している熱狂的カトリック信者たちの間での伝承について報告した。彼はひとりのメノ派の老農夫と牧師にライフ・ヒストリーを詳しく語つてもらひ、その二人が伝える口承文

芸とつきあわせてみて、その共通点と相異点を明らかにし、個人の生いたちと性質が語り手としてのちがいに直接的につながることを認識した。そして語り手研究においてライフヒストリーからの把握の重要性を強調した。

フィンランドの若手研究者で現在注目されているユハ・ペントイケイネンも語り手個人のライフヒストリー研究の重要性を、カレリア地方の語り手、文盲のマリナ・タカラについての個別研究を通じて訴えた。彼はメルヒュン研究の基本的研究法として七つの方法を挙げたうえで、マリナ・タカラの問題に入った。その七つの方法とはつぎのとおりである。1エコロジー的アプローチ——環境決定要素——土地における個人——適所を決める要因——個人についての研究が文化全体、つまり文化を超越した生態系に関してだけでなく、第一の環境においても民族学的観点を、個人のエコロジー的考察に与える。2、文化と人格——交錯文化テストの定義と批判。3、民族的同一性と同一化——民族学上のグループと民族的同一性——人格世界観、レパートリーの成立に与える影響。4、レパートリー分析——伝承の生態学、集団伝承、専門家たちの情報についての概念と批判——ジャンルとそれらの意味。5、世界観分析——世界解分析の単位を運用させることに關する世界観問題の概念。6、構造分析——形而上の構造と個人の自由——叙事詩的法則の理論——文化伝達の構造的ルール——民俗学ジャンルの原理——人間を超えてか、そうではないか——明らかに潜在する機能と意味——伝承創造と再現と変容のパターン——生産、受容能力、ライフヒストリー・インタービュー……正当さと信頼度の深さについての研究——特異な個人あるいは「社会人としての人間」——相互関係方式としてのフィールドワーク——民族誌学者または資料提供者の影響。

マリア・タカラについて、その祖先はカレリア地方の文化内にあるが、彼女自身の文化的レパートリー、世界観、人格はすべて彼女のユニークなライフヒストリーに応じて変ってきたことを認めている。そして語り手の世界観を問題にするばかり、人間によつて言語化された伝承の要素だけを調べるのは誤りであり、言語として表現されていなくとも自分の行動のなかで認められる世界観を問題にすることが重要であると主張する。

フィンランドの口承文芸研究の中心的人物で、国際口承文芸学会の現会長であるラオリ・ホンコは、「生態型の成立」と題して、伝承が環境に順応する際の仕方を三型態に分類して説明した。第一型を彼は環境形態学的、あるいは「外への順忯」とよび、それをさらに伝承のポピュラー化と、地方化というサブフォームに分けた。ポピュラ化とは伝承された外国の自然背景が、受け容れた自然的素性にどうやってとつてかわられたかの問題。地方化とはある伝承を、それぞれが体験した地点や場所に結合させることである。第二型を彼は伝承・形態学的、あるいは「内への順忯」と呼んでいる。メリヒエンの中である役割をになつた人物を、よく知られた人物に結合することである。これらふたつの順忯型でおきた変化は連続的であり、ただ一度だけおきる。彼は第三型を機能的、あるいは「一時的な、状況に応じた順忯」とよぶ。それは伝承における不連続的変化、伝承の多様な変化の可能性、そしてミクロな環境への順忯である。結論としてホンコは、生態系化においてはさまざまな（経済的、社会的、文化的）システムが溶けこんで、それらの現実に伝承を順忯させていくという。

その他、アメリカのアラン・ダンディス、W·F·H·ニコライセンなどの研究が注目を浴びたが、紙数の都合で省略する。約二年

後に会議録が出版されるであろうから、詳しい内容についてはそれに期待していただきたい。

前回、一九七四年の世界大会には日本から二名の研究発表があつたが、今回は三名の研究発表があり、出席者は発表者以外に六名であつた。参加者の数、特に発表者の数がふえることは喜ばしいことである。しかし世界中のいろいろな民族が参加する国際学会に出席し、研究発表するには、それなりの心構えと、準備とルールを守る精神が必要と思われる。われわれ日本人は平常ほど他民族との接触なしに暮らしているために、他民族といつしょに事をおこなうときの心構えを忘れがちだが、口承文芸研究の分野で今後国際交流を進めるためには、そうした心構えをきちんととむたなければならぬだろうということを痛感した。自分の発表の日だけ出席するのではなく、全会期出席して諸民族の研究者の発言を聞くべきだし、レセプションその他の機会には外国の研究者たちとの交流につとめるべきだと思うのである。いわんや、研究発表のときの外国语が諸民族の人たちにわかつてもらえるように準備することは最低の義務である。

（おざわ としお・日本女子大学）